

# AFRC



# NEWS

URL:<http://unit.aist.go.jp/actfault/activef.html>

Active Fault Research Center



## CONTENTS

### トピックス

2007年ソロモン島地震津波調査報告

フィールド、トレンチ情報

学会、研究会参加報告

府中市自治会連合会の見学対応

出張報告（韓国訪問）

発表論文

新聞、テレビ報道

対外活動報告（2007年6月）

# 2007年ソロモン島地震津波調査報告

行谷佑一（海溝型地震履歴研究チーム）

## 1 はじめに

日本のはるか南方、赤道を越えオーストラリアの手前に、ソロモン諸島がある（図1）。正式国名が「ソロモン諸島」である通り、この国はたくさんの島々からなる国である。ここで、今年（2007年）4月2日の現地時間午前7時39分にマグニチュードMw8.1の地震が発生した。この地震の震源から東へ約400 km離れた首都Honiaraでは、気づく人も少ない程度のゆれであったようだが、震源に近い島々では激しいゆれに襲われた。また、この地震にともない津波が発生し、震源近くの島々では死傷者が出て、家屋流失などの被害に見舞われた。さらにこれらの地域では、隆起沈降現象が発生した。

この地震・津波の状況を調査するために、わが国で調査団が結成された。そのメンバーは、北海道大学の西村裕一氏（団長）、同じく北大の谷岡勇市郎氏、同・中村有吾氏、東京大学の都司嘉宣氏、アジア防災センターの村田昌彦氏、および筆者である。また、米国からKent State UniversityのStephen Woodward氏も加

わり、計7名によって現地調査を行った。調査は地震発生の9日後である4月11日から4月22日まで行った。その時の様子を、以下に報告する。

## 2 現地調査前までの道のり

どの津波災害でも共通して言えることだが、現地調査は災害直後のできるだけ早い時期に行うのがよい。津波の高さを記録する津波痕跡には、たとえば津波が襲ったことにより海水に没した草木の枯れ（枯れているところと生きているところの境界線まで津波が来たことが判明する）や壁に付いた浸水線などがあるが、これらは時間が経つにつれ判明しづらくなる。また、津波の様子を知るには、現地住民からの証言も欠かせない。これについても、時間が経つにつれ人々の記憶があいまいとなってしまう、記憶がまだ鮮明なできるだけ早い時期に聞き取り調査をするのがよい。

では、地震が発生したすぐその日に行けばいい、という話になるが、そんなに簡単に話は進まない。海外緊急調査を行う場合には、まずは現

地政府機関や日本大使館の協力が必要である。とくに、われわれの調査の趣旨を現地政府機関へ伝え、理解されることは重要で、当局の許可なしに現地住民の方々の協力は得られない。また、調査においては、土地勘がないわれわれの案内や、通訳、宿およびボートなどの移動手段の手配が欠かせない。ただし、通訳に関してはソロモン諸島の公用語は英語なため、とくに最優先的に必要ではなかった。

被災直後で現地の方々は大変混乱していたが、JICAのソロモン諸島駐在員の西村善彦氏の多大な尽力により、現地政府機関などと連絡がとれ、調査のスケジュールにめどがたった。ただし、この調査スケジュール計画には、われわれ調査団だけでなく、多くの津波研究者ならびに関係者からの協力があったからこそできたことを特記しておく。すなわち、多くの研究者や関係者が、津波直後に国内・海外の津波研究者用のメーリングリストなどを用いて、頻繁に情報提供を行った。われわれの調査はここで得られた情報や協力なしには実

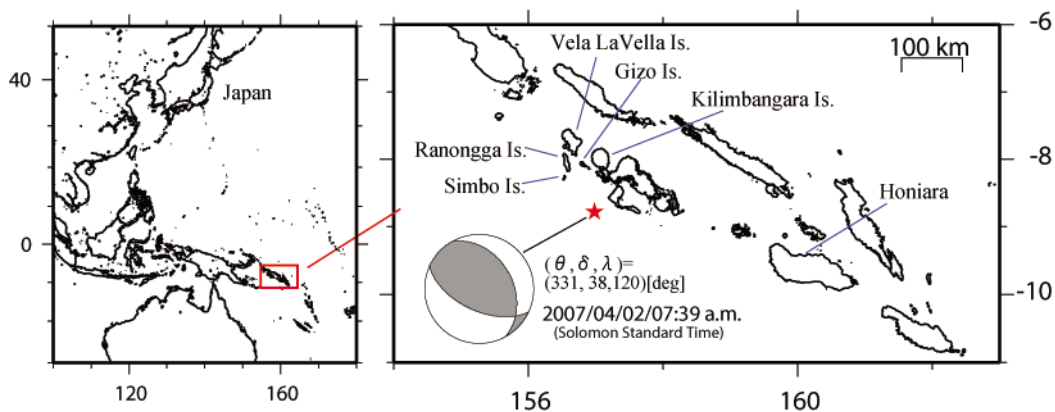


図1 ソロモン諸島およびその島々の位置。

現できなかった。したがって、地震発生後、調査へ向かうまでの9日間は決して長いものではなかった。十分に必要な時間だったのである。

なお、現地調査へ行く前の重要なことの一つとしては、現地の地図や衛星写真を入手しておくことも挙げられる。土地勘がない、インターネットが繋がらない、などの状況の中で、現地調査においては紙に打ち出した地図や衛星写真に勝るものはない。

このような準備を整えて、われわれは4月11日に成田を出発することができた。なお、日本からソロモン諸島への直行便は存在しない。そのため、成田からオーストラリア北東岸のBrisbaneへ行き、そこでトランジットして首都Honiaraへ向かった。現地関係者へ連絡が取れてからの出発であったが、なにが起こるか不安な点も多々あったので、いちおう野宿ができるようにテントおよびシュラフを持って行った。

### 3 現地における調査前の行動

途中成田からBrisbaneの間で機中泊をとったので、われわれが首都Honiaraへ着いたのは、4月12日の午後であった。日本との時差は+2時間、ソロモン諸島の方が早い。とにかく暑い、というのがHoniara国際空港で降りたときの第一印象である。このHoniara国際空港で西村善彦氏にお会いし、まずは現地の状況を伺った。また、同氏の協力により日本大使館ならびに現地政府機関のNDC(National Disaster Council)において、われわれの調査目的を説明する機会を得た。そして、Honiaraから周辺の島々を結ぶ、おもに物資輸送を目的とした政府チャーター機に乗る許可もいただいた。これは大変ありがたいことであった。

おもな被災地は首都Honiaraから西へ約400km離れたところに位置しているため、首都Honiara到着の翌日である13日に、まずは西部の中心地であるGizo島へ飛行機で行くことになった。許可を得た政府のチャーター

機にのる予定であったが、空港は大変混乱しており、乗るよう指定された飛行機に乗れず、結局予定より6時間近く遅れて乗ることになった。

それでも、被災地に行けることは大変ありがたいことであった。

Gizo島では、在HoniaraのY. Sato氏による大変なご厚意で同氏の別邸をわれわれの調査中に借りることができた。また、島内を移動する車の手配、周辺の島々へ移動するために必要なボートの斡旋、および案内下さる現地住民の方の紹介も受けた。Y. Sato氏は日本出身の方で、何十年も前にソロモン諸島へ移住され、いまではソロモン諸島ではよく知られた実業家である。このY. Sato氏のご厚意により、昼間はGizo島およびその周辺の島々をボートにより調査し、夜間はGizo島のSato氏の別邸に泊まる、ということができた。テント・シュラフは役に立たずに済んだ。

食料については、物資が比較的豊富な首都Honiaraでたくさんのお水、缶詰、クラッカーを入手してからGizo島へ入った。被災地のGizo島において、貴重な水などをわれわれ調査団が買い、住民への迷惑となってしまう

うことを避けるためである。しかしながら、Gizo島へいざ行ってみると、意外に物資は豊富であり、商店で品切れをしているような印象は受けなかった。われわれは、商店で袋入りのインスタントラーメンを、市場で果物などを最小限に買い、夜は缶詰のコンビーフ入りのインスタントラーメン、朝はコンビーフとクラッカー、および昼は果物を主に摂った。なお、Y. Sato氏の親戚から、果物などの差し入れを受け、大変心温まった。

### 4 現地調査結果

われわれの現地調査により判明した津波高さ分布を図2に示す。この図を見ると、Gizo島の南西約30kmに位置するSimbo島では、Tapuraiという集落で今回の津波の最大高さである約9mの津波が襲ったことがわかる。また、Gizo島では平均4m程度の津波が襲った。さらに、震源から遠くなる方向、すなわちSimbo島から北に向かうRanongga島、Vella LaVella島などでは、津波の高さが次第に小さくなっていることがわかる。

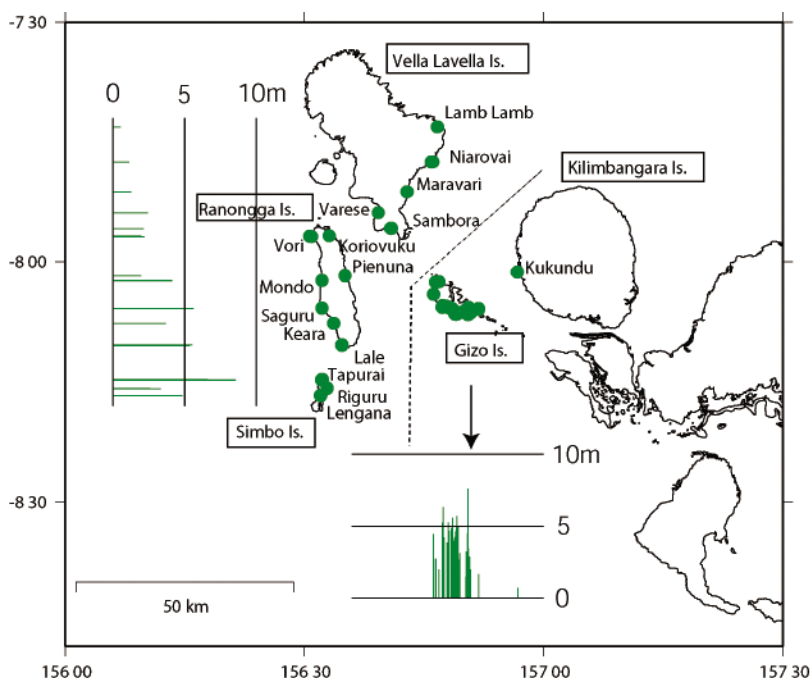


図2 現地調査により判明した津波高さ分布。

これらの島々では防波堤がないために、沿岸の集落は津波を直接に受ける。写真1はGizo島の南岸に位置するMalakerava 3丁目における津波被害の様子である。ご覧の通り、家屋は海からすぐ近くに位置し、津波によりほとんどが破壊されたことがわかる。このような様子は、この集落に限らずほとんどの集落で見受けら

れ、1-2軒の家屋が残っているだけどころか壊滅状態、という集落も少なくなかった。

ところで、津波によりほとんどの家屋破壊、という大きな災害に見舞われたのにもかかわらず、犠牲者の数は全体で50人程度と、津波の規模に比べ少なかった。たとえば、先ほど言及したSimbo島北側のTapuraiと

いう集落では、人口400人で家屋などは壊滅状態にもかかわらず、犠牲者は7人にとどまった。この最大の理由として、多くの住民は2004年インド洋地震津波のことをラジオや新聞を通して知っており、今回の地震で「津波がくるから逃げろ」と思い、即座にそれを実行したことが挙げられる。これには、夜ではなく、明るい朝7時半過ぎに地震が発生したことも幸いした。また、ほとんどの集落では裏側が崖になっており、短い距離を移動しただけで容易に高さを稼げる地形であった。多くの住民の証言によると、津波は地震発生後数分で集落に襲来したようであるが、このような短時間で逃げられたのは、まさに上記の2つの理由によるところが大きい。なお、この集落の犠牲者は、地震の後は津波がくることは知っていたので、海岸から海を、海岸と直角な方向にみていたのだそう。ところが実際は、津波は右(南)から浸入してきて、それに気づくのに遅れたため、亡くなってしまったそうである。



写真1 津波による被害の様子 (Malakerava 3丁目, Gizo島)。

いっぼう、われわれは津波だけでなく、地殻変動の調査も行った。すなわち、各島々で隆起沈降現象があったために、その大きさを測定した。その結果が図3である。これを見ると、Ranongga島では隆起し、その周りの島々では沈降現象があったことがわかる。

たとえば、Ranongga島のSaguruという集落では2.5 m程度の隆起があった。写真2はそこでの隆起の様子を表しているが、海中にあったサンゴなどが隆起のため海面上へ出てしまっている様子がわかる。2.5 mという隆起量は、サンゴの最も高い部分が地震前は海中にあったとして、その現在の高さを海面から測ることで求めた。ここを調査するさいに、死んだサンゴの上を歩いてまわったが、バリバリとサンゴを壊してしまい申し訳ない気分になった。また、いままでも海中にいたものが地上に上がり死んでしまったため、この隆起地帯は鼻をつく強い腐敗臭で覆われてい

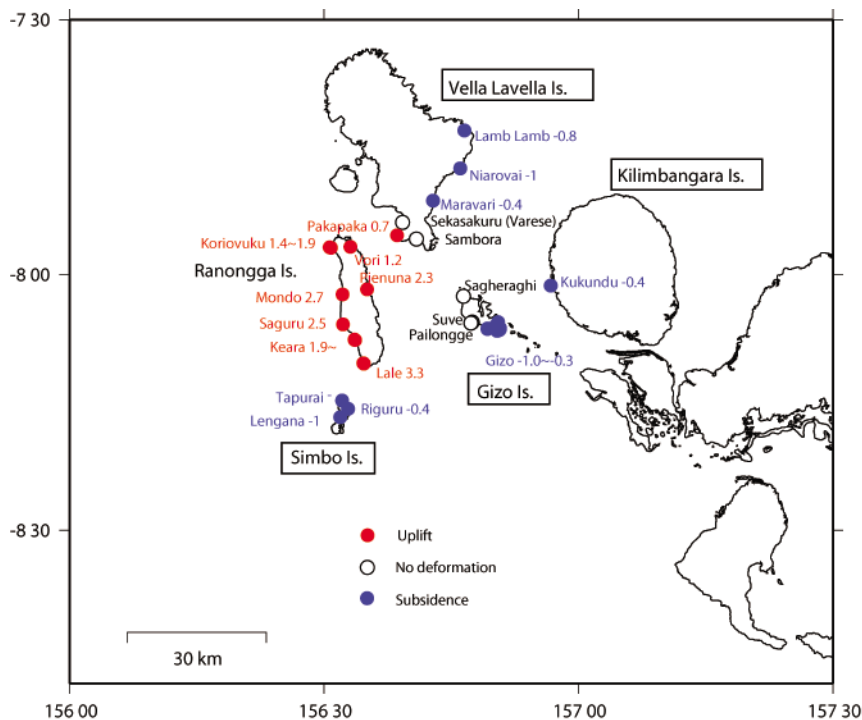


図3 現地調査により判明した隆起沈降量。



写真2 隆起しサンゴが干上がった様子 (Saguru, Ranongga 島).



写真3 船着き場が沈降した様子 (Lengana, Simbo 島).



写真4 地震により土砂崩壊した様子 (Mondo, Ranongga 島).

た。小さなハエも多く飛んでいた。なお、ここでの津波の高さは5mを超す高さであったが、地面自体2.5m程度隆起したため、実際に津波が集落を襲うことはなく犠牲者はいなかった。

また、沈降現象に関しては、たとえば Simbo 島の Lengana という集落で1m程度の沈降量があった。写真3はそこでの沈降の様子を表しており、港の船着き場が沈降して海面すれすれになっていることがわかる。手前の石は、岸とこの船着き場を結ぶ通りであったらしい。住民の証言から、地震前は船着き場の上面と海面の間は約1mであったそうなので、ここでは1m程度の沈降があったことが判明した。

に関しては、不明な部分も多い。上記のように、多くの住民は強い揺れを感じたために津波を予見し避難に成功した。したがって、Gizo 島あるいはその周辺では強い揺れであったことは確かである。しかしながら、たとえ地震により家屋が壊れても、そのあと津波で破壊・流失してしまったために、純粋に地震のみによる被害を把握しにくい。地震の強さがわかる例として、写真4を添付した。海岸すぐ近くの崖が崩れていることがわかる。ここは震源域直上の Ranongga 島西岸の Mondo という集落であるが、住民の証言によるとこの崖崩れは今回の地震により発生したそうである。さらに、この崩壊によっ

さらに、住民の証言により、明確に「隆起も沈降もしなかった」という場所もあった。興味深いことに、この変動しなかった場所は、隆起した場所と沈降した場所との間に位置している。

ところで、地震の被害に

て、2名の方が亡くなったそうである。今回確認した、地震による犠牲者の唯一の例である。

以上の通り、われわれは今回の調査で津波や地殻変動などの状況を細かく調査することができた。この詳細や、得られたデータによる断層モデルの推定などの解析は、今後別の雑誌で報告する予定であるので、そちらを参照いただきたい。

## 5 まとめ

2007年ソロモン島地震津波を受けて、われわれは地震発生の9日後に現地に入り、津波高さ調査を行った。それによると、震源地近傍の Ranongga 島で9m程度の高い津波が襲ったことが判明し、Gizo 島などでも平均4m程度の津波が襲ったことがわかった。特筆すべきこととして、沿岸部の集落は津波によりほとんど家屋などが壊滅状態であったにもかかわらず、津波を予見して避難したために多くの住民が助かった。また、隆起沈降量調査も行い、最大で3mを超す隆起、ならびに1m程度の沈降が生じたことがわかった。

最後に、地震直後にこのような調査を実現させて下さった関係者のみなさまに感謝致します。とくに、JICAの在ソロモン諸島駐在員の西村善彦氏、在 Honiara の Y. Sato 氏などのご協力には篤く御礼申し上げます。

## フィールド、トレンチ情報

2007年5月25日-6月10日

## 中国・Fuyun 地震断層の調査を再開

栗田泰夫

中国・新疆ウイグル自治区の北部で1931年に出現したFuyun地震断層の調査を、1年半ぶりに再開しました。全長165kmの地震断層のうち、北部の約50kmは2005年秋までに調査を終えており、今回はその南側の約20km区間をマッピングしました。調査チームは、前回と同じく、科学院地質・地球物理研究所のFu Bihong博士と運転手のWanさん、それに今回初めて参加する大学院生のZhangさんの4名で、現地の調査は5月27日～6月6日までの11日間でした。

今回の調査区間は、地震断層が大規模な地質構造線と交差する付近に当たり、規則的な走向の変化や断層線のステップ、分岐が見られました。とりわけ、2-5km毎に発達するプリアパート構造は印象的で、一見複雑な断層の幾何学構造が何らかの規則性をもって構成されていることがうかがえました。さらに、数～10mにもおよぶ右ずれ変位をもつ主断層の周辺には、1-2km幅の間隔において、長さ数kmの独立した逆断層が発達していることも確認できました。長大な地震断層の破壊過程や、地質学的な構造発達の観点から興味深い課題が幾つか見えてきました。次回は9月に再訪して、中部セグメントと南部セグメントの境界をなす大規模なプリアパート構造とその前後の調査を行う予定です。

21世紀になって本格化した「西部大開発」の国策と、近年のエネルギー・鉱物資源の価格高騰を受けて、かつてのシルクロード「草原の道」も急速に変貌を遂げつつあります。ウルムチから約500kmの道のりのうち300kmあまりはジュンガル盆地のゴビと砂漠を突っ切るのですが、改修が終わったばかりのハイウェイは快適で6時間足らずで

Fuyunの町に着きました。こうした開発の一方で、過放牧などによる草原の荒廃が深刻になってきており、一部では大規模な放牧の規制によって草原の回復も試みられています。地球規模の環境問題の一端を垣間見た調査でもありました。



約9m右横ずれした尾根と背後の累積変位による断層地形をみる。

2007年6月13日

## ワシントン州 Bremerton における古津波痕跡調査

澤井祐紀

ワシントン州 Bremerton において、古津波痕跡に関する地質調査を行った。Bremerton はシアトルからフェリーで1時間ほどの町で、約1000年前のシアトル断層の活動に伴った津波が襲来した場所と考えられている。現地においてピット掘削を行った結果、層厚30cm以上の津波堆積物と考えられる砂層を観察することができた。この砂層には明瞭な堆積構造が見られ、堆積学者による今後の研究が期待される。

2007年6月13日-6月14日

## 1872年浜田地震海岸変動調査

宋倉正展

日本海沿岸域における歴史地震に伴う海岸変動の再検討と海洋リザーバー効果の評価のため、1872年浜田地震で海岸変動が記録されている島根県浜田市周辺で隆起生物遺骸群種の調査を行った。藤森ほか(1990)ですでに報告されている石見曇ヶ浦周辺の海食洞では、標高0.8～1.8mにフジツボやヤッコカンザシからなる生物遺骸群集を確認した。

2007年6月25日-26日

## 想定東海地震震源域での古地震調査

藤原 治・小野映介・Heyvaert Vanessa

過去に発生した東海/東南海地震に伴う地殻上下変動の痕跡を検出することを目的に、浜名湖南部から西方へ延びる浜名川沿いの低地でハンディ・ジオスライサーによる掘削調査を行った。浜名川は1498年明応地震までは浜名湖と遠州灘をつなぐ河川であったが、現在は規模が小さくなり、かつての氾濫原や河道の大部分は低湿地となり、水田や養鰻池として利用されている。浜名湖周辺では、歴史記録や断層モデルからは、東海/東南海地震に伴って沈降が予想される。

4地点での掘削の結果、深度1mから2.9m程度のコアが得られた。コアに見られる地層は主にシルト層と砂層・礫層の互層からなる。砂層・礫層には流水から堆積したことを示す堆積構造があり、これらを形成した原因として高潮、津波、土石流が考えられる。

シルト層は植物の根痕を含むことなどから淡水成と考えられるが、分布高度が現海面よりも低い。元々河川周辺の湿地で堆積したものが、後年に沈降した可能性がある。地層の年代測定や微化石の分析を行い、地震に関連する沈降現象を検出する予定である。

## 学会，研究会参加報告



2007年6月14日-16日

## アジア学術会議

佐竹健治

6月14-16日に沖縄コンベンションセンター（宜野湾市）において開催された標記会議に出席した。14日は開会式と総会があり，アジア学術会議の過去1年間の活動が報告された。

15日の午前中は，自然災害・水環境・海洋安全・ジェンダーの4つのパラレルセッションが開かれた。私が参加した自然災害のセッションでは，日本からは濱田政則・住明正・入倉孝次郎・佐竹健治・日下部治・池田駿介・竹内邦良が学術会議の課題別委員会での議論を中心に紹介した。中国からは Zhaoyin Wang が土石流について，インドとインドネシアからは Harsh Gupta と Jan Sopaheluwakan が，それぞれの国での自然災害とその軽減への取り組みについて紹介した。午後の総会では，各セッションの報告があった。

16日は太平洋学術会議とのジョイントシンポジウムが開かれた。まず，秋篠宮殿下が，環境問題に関しての地域からの発信と学際的な取り組みの重要性について，ご自身の経験に基づいた特別講演をされた。次に IPCC の議長である Rajendra Pachauri が地球温暖化について，Leo Tan（シンガポール学術会議会長）が環境問題についてシンガポールでの取り組みを中心に基調講演を行なった。

2007年6月20日-6月24日

## 日本・インドネシアの自然災害に関するワークショップと APRU/AEARU シンポジウム「環太平洋の地震災害」

佐竹健治・藤野滋弘

日本・インドネシアの自然災害に関するワークショップは，インドネシア科学院（LIPI）と日本学術振興会（JSPS）の共催で，6月20日にジャカルタの LIPI で開催された。午前中は主に，本年度から開始された両国の地震に関する二国間共同研究（GPS，津波，古地震，強震動，地域防災活動）について，進捗状況の報告があった。産総研は LIPI と共同で，スマトラ島西部における津波堆積物の調査とジャワ・スマトラ両島における活断層調査を計画している。午後はそれ以外のインドネシアとの共同研究について，建築研・京都大学・防災科技研・JAXA などの研究者から紹介があった。なお，このワークショップや二国間共同研究は，JSPS のアジア科学技術コミュニティ形成戦略（科学技術振興調整費）の一環として実施されている。

環太平洋の地震災害についてのシンポジウムは，APRU（環太平洋大学連合）と AEARU（東アジア研究型大学協会）の共催で開かれている地震に関するシンポ

ジウムの第3回として，6月21・22日の2日間にわたってジャカルタのホテル日航で開催された。コンピュータネットワークやインドネシアの津波警報システムについての基調講演の後，地震の予知と早期検知，スマトラ地震からの教訓，津波，火山災害，地震工学的アプローチ，防災と復興の戦略の各セッションについて，主に日本とインドネシアの大学の研究者の発表があった。

6月23-24日はジョグジャカルタ周辺の巡検に参加した。まず20世紀後半に発掘されたプランバナン遺跡（ヒンドゥー教の遺跡）を訪れた。昨年のジャワ島地震によって大きな被害を受けており，中に立ち入ることが禁止されている（写真1）。続いて，オパック川沿いに，地震による被害が大きかった場所，地割れなどが観察された場所を訪れたが，ほとんどの家屋は復旧しており，また地震後1年間の植生の回復は目覚しかった。その後，インドネシア気象庁の地震観測所を訪問し，地震計や観測システムを見学した。翌日はメラピ山の山腹にある火山観測所を訪問した（写真2）。続いて，メラピ山麓のボロブドゥール遺跡（仏教遺跡）を訪問した。こちらは過去にメラピ山の噴火による影響を受けてきたが，昨年の地震による影響はなかった。



写真1 プランバナン遺跡における2006年ジャワ島中部地震の被害。



写真2 メラピ火山観測所における記念写真（名古屋大海津正倫氏撮影）。

## 見学訪問対応



2007年6月15日

## 府中市自治会連合会の見学対応

堀川晴央・藤原智晴・國府田真奈美

東京都府中市在住の方々 100 人前後をお迎えして、関東地方に被害を及ぼしうる地震の発生場所と地震の被害を減らすための方策に関する講演を 30 分ほど行った。原寸大のものを揺らした実験結果の映像をお見せしたが、単に話だけするよりも効果的であると感じた。



講演会の様子。



地質標本館見学の様子。

## 出張報告



2007年6月27日-29日

## 韓国訪問

佐竹健治

6月27-29日に韓国を訪問した。27日は成均館大学において、日本海（韓国では東海と呼ぶ）における津波波源についてセミナーを行なった。日本海東縁部における地震（1983年日本海中部地震や1993年北海道南西沖地震）や火山噴火（1741年渡島大島噴火）による津波では韓国東海岸でも被害が出ていることから、津波の波源についての関心が高く、今回の講演を依頼された。他に、2004年インド洋津波の調査結果などについて情報交換を行なった。

28日はソウル大学、29日は韓国地質資源研究所（KIGAM）を訪問し、研究に関する情報交換や2008年AOGS（釜山で開催）についての協力を要請した。KIGAMでは所長・国際関係室長・各研究部長らとの会談で、AOGSについての説明をした。KIGAMとGSJとの研究交流は多いので、双方からコンビーナーを出してセッション提案をすることなどが検討された。

## 発表論文

## Major Contribution of Tsunami Deposit Studies to Quaternary Research

藤原 治

第四紀研究, vol.46, no.3, p.293-302

津波堆積物の研究による第四紀学の進歩への貢献について、地質学と防災科学の両面から述べた。地質学の面では、地層の形成要因として津波が少なからず関わっていることが認識され、地層の観察眼が洗練された。防災科学では、過去の地震・津波の履歴を復元することで、過去の理解とそれに基づく防災への備えを提供した。



## 新聞, テレビ報道

2007年6月4日-8日 日本経済新聞 夕刊  
人間発見 大地が残した語り部

寒川 旭

日本経済新聞 夕刊 特集記事「人間発見」で「大地が残した語り部」として、5日間連載した。南海地震の最も若い体験者。少年時代は文系志望、大学で活断層研究を始め「日活」作成メンバーに加わる。遺跡で液状化跡を見つけたのを契機に「地震考古学」をはじめ。その後、調査していた野島断層が活動して阪神・淡路大震災が発生。現在は、自作イラストなどを使って啓蒙活動に努めている。

2007年6月4日 朝日新聞 朝刊31 (科学) 面  
地震考古学 遺跡の中にくっきりと

寒川 旭

科学面の「波」に自筆のイラストとコラムを掲載。地震考古学で多く扱う液状化現象のメカニズムを説明し、遺跡で見つかった液状化跡の年代の求め方を解説。

2007年6月17日 毎日新聞 朝刊 27 (社会) 面  
知ってるほど地震学

寒川 旭

毎月1回の「知ってるほど地震学」シリーズの「規模大きい海溝型」で、1891年を期に発足した震災予防調査会で南海地震の記録の収集が始まり、規則性に注目した今村教授が昭和南海地震の前に観測を行った。最近では、記録や地震痕跡から発生史の解明が進み、今世紀中頃の発生が推測されている。

2007年6月18日 朝日新聞 朝刊 27 (科学) 面  
地震考古学 秀吉も仰天の地震の力

寒川 旭

科学面の「波」にイラストとコラム掲載。秀吉の時代の伏見地震で生じた液状化跡が多く遺跡で見つかった。芦屋廃寺はこの地震で倒壊して廃絶し、西求女塚古墳も真ん中から滑り落ちた。

2007年6月25日 朝日新聞 朝刊23 (科学) 面  
地震考古学 完治していない傷跡

寒川 旭

科学面の「波」にイラストとコラムを掲載。活断層の概要を説明。有馬-高槻断層帯のトレンチ調査で中世末の水田が変位し、近世の水田が水平に覆っていた。京都から淡路島にいたる一連の活断層が伏見地震を引き起こした。

## 2007年6月25日

## 産経新聞科学欄・ソロモン島津波

行谷 佑一

2007年4月にソロモン島津波の現地調査をさせていただいたが、そのことについて取材され、産経新聞の科学欄に載った。おもに、津波分布と、なぜ地震(津波)の規模が大きかったのに、犠牲者が少なかったのか、ということが書かれている。

## 活断層研究センター活動報告 (2007年6月)

## 2007年6月26日

地震動予測地図高度化WG (杉山・佐竹出席 / 東京)

## 2007年6月27日-26日

地震調査委員会長期評価部会 (杉山出席 / 東京)

## 2007年6月28日

地盤耐震に係る意見聴取会 (杉山・岡村・吾妻出席 / 東京)

## 2007年6月29日

地震調査委員会強震動評価部会 (杉山出席 / 東京)

## お知らせ

## 平成19年(2007年)新潟県中越沖地震

2007年7月16日10時13分頃、新潟県上越沖でM6.8の地震が発生し、新潟県柏崎市、長岡市、刈羽村、長野県飯綱町で震度6強を記録したのをはじめ、各地で強い揺れを観測しました。

活断層研究センターでは、地震発生直後から情報収集を開始し、ホームページ(<http://unit.aist.go.jp/actfault/katsudo/jishin/niigata070716/index.html>)において調査速報を随時公開していく予定です。



独立行政法人  
産業技術総合研究所 活断層研究センター

〒305-8567 茨城県つくば市東 1-1-1 中央第7事業所  
Tel: 029-861-3691 Fax: 029-861-3803  
URL: <http://unit.aist.go.jp/actfault/activef.html>

2007年7月13日発行  
AFRC NEWS No.69 / 2007年6月号

編集・発行 独立行政法人 産業技術総合研究所  
活断層研究センター  
編集担当 黒坂朗子